

芥川だより

発行日 * 2024年1月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

まだ、運は残っているか？



物事の流れを運の良し悪しで見るのは、あまりにも安易な見方だと思うが、そうでもないという説明でできないことも多い。難病を患い長期間入院した病院を退院する時に担当医から「まだ、運が残っていましたね」と言われたときに、何とも言えない感慨が胸にこみあげてきた。

懲りない私は、頭を打ち硬膜下血種になった時も、不思議な感覚で体調の変化を感じ転院を決意し即日実行した結果、運よく老練な脳外科の医師に手術を受け見事に回復した。あの時、もし少しでも遅れていたら、今の私はなかった。ただただ、運がよかったのだ。

私の人生設計は、75歳で死ねば大成功というシナリオになっている。それ以上長生きすれば、どんどん生活は苦しくなる。間違っても90歳を超えたら生活できないかも。何とも言えないが、私にとって長生きは喜ばしい出来事ではない。この歳で、早く死にたいとは言いにくいですが、本心では、早く死んだ者が勝ちだという意識だ。

今回の能登大地震では300名を超える人が死亡・行方不明になっていると聞く。さらに被害は大きくなるだろう。山間地にある能登は過疎地域で高齢化も進んでいて、少子高齢化が地域の持つ力を弱くしているだろう。自立していく力が不足しているのだ。だから、志賀町の原発がつくられ、交付金もあり生活が出来ていたのだと思う。

今回の地域性や少子高齢化社会、そして原発は、近未来の日本の姿を映し出しているのではないだろうか。私には、そんな思いがしてならない。今なら出来る、いやもう手遅れだ。地震と原発、そして少子高齢化が日本の未来に暗い影を落とす。一刻の猶予もない、今年が最後の日本再生の機会だろう。長年の政治への無関心が招いた悲劇だ。日本人は、もう少し賢いとうぬぼれていたただけだったのか。迷いが尽きない正月だ。

死をめぐるあれやこれ(110) 石川 吾郎

元日・能登の大地震に思う

元日、日本人の多くがこの震災のニュースにショックを受けた。この大地震には十分な前兆があった。なにせこの地方には、群発地震が続いていたのは有名だ。◆ところで、日本にはまだこの地方と同様な前兆がみられる地域がいくつかある。一つは千葉県沖ないし東京湾。ここでも同様な群発地震が頻発してマグニチュード(M)7以上の地震が予想されている。この地震の恐ろしいのは首都直下型かそれに近いものになる点で、被害は甚大となる。次は有名な南海トラフ巨大地震。阪神地方から東海地方全域にM8クラスが二回襲い津波被害も甚大となるのは確実だ。さらには北海道東部の千島海溝の巨大地震。規模は東日本大地震と同じM9になると予想されている。日本は今、巨大地震が多発する時期を迎えている。最も必要なのは必ず起こってくる巨大地震の被害を最小にする対策の実行である。そのためには巨額な国家予算を計画的に投入すべきだ。これには建設国債の発行も必要だ。◆国債は国の借金で、これを増やしてはいけないとの論がある。だが国民が富むために、実は政府は赤字でなければならぬ。政府の赤字は国民の赤字なのだ。政府はこの三十年緊縮政策で、ほぼ予算規模を縮小しこの国を衰退させ、財源が足りないと消費税増税、年金負担増などで国民の生活を貧困に追い込んできた。政府を黒字にするとほとんどでもなく誤った政策である。政府の赤字は、実はあるべき姿なのだ。

今、巨大地震対策でインフラ整備・被害の最小化を目指す令和のニューディールと言えるような政府の財政拡大が必要な局面だ。国民を緊縮脳へと洗脳する実行役は、実はNHKニュースとニュース解説だ。予算の拡大に対して常に批判的なコメントを加えて国民を洗脳していることに気づくべきだ。ただし予算の腐敗した使用には、厳しい監視の目が必要なことは言うをまたない。

芥川だより二〇四号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム110	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 118	坂本一光	2
哲学命の時事放談 68	祖蔵哲	3
大峰奥駆道 74	下村嘉明	4
新型コロナウイルス愚考	明石幸次郎	5
その40		5
オクラの山たより 88	因丁生	5
隠された歴史 63	満田正賢	8
道を行く 四七	成瀬和之	10
俳句	影山武司	11
編集後記	SK生	11
ふみの道草 66	山椒魚	12

素老人☆よもだ帳 (118)

坂本一光

◆平和への岸に上げれぬ水の星

今年もまた、「戦争と平和の境消えた星」に住んでいるのかと思わざるを得ない年になるのだろうか。新しい年が明けたはいいが、希望が持てる訳ではない。平和とは、必ずしも、戦時でないことだけを意味しないからだ。「普通に働き、普通に食べて、普通に暮らせる」毎日こそが、誰も口にせずとも、平和そのものなのだと、私も思う。どうしてそんな当たり前の暮らしが出来ないのか。先日NHKが再放送した、派遣労働者の死の謎を追ったドラマ『ガラバゴス』の中で吐いた織田裕二のセリフが胸を打った。

そんなことを感じていたとき、ふと聴いた歌が『人間の歌』である。二〇一六年四月に全国十一カ所で行われた韓国のサム・トウツ・ソリという音楽ユニットの公演で歌われた曲である。(株)音楽センターが販売したCDには十曲が収録されている。口伝歌謡や一九八〇年光州民主化運動を称える歌があり、キューバを離れるチェ・ゲバラをうたった歌、朝鮮学校の歌もあり、『死んだ男の残したものは』もある。最後の歌が『人間の歌』であった。日本の「うたごえ」を想起する

が、この公演だけのために組まれたオリジナルユニットであると言う。その歌詞は次のとおりである。

人間の歌

作詞・作曲 山ノ木竹志

- 一 傷つき倒れた 友の背に
眼差し注ぐ 人はいるか
病み疲れた 乙女のその手に
温もりを添える 人はいるか
- 生きる悲しさ 翼に替えて
- 人のよろこび 歌に託して
- わたしは歌う 希望の歌
- 共に歌おう 人間の歌

- 二 ぐずおれた痛みを 笑顔に包む
職場の仲間を 信じているか
死を選んだ 仲間の思いを
心に暖めて 闘っているか
- 生きる苦しさ 翼に替えて
- 人の気高さ 歌に託して
- わたしは歌う 人間の歌
- 共に歌おう 人間の歌

- 三 人は微笑み 歌があふれる
そんな街を ここに求めて
痛み分け合い 楽しさ分かち
歩いてゆきたい 人間らしく
- 生きて生きて 生き抜いて
- 生きて生きて 生き通して
- わたしは歌う 自由の歌
- 共に歌おう 人間の歌

- 生きて生きて 生き抜いて
- 生きて生きて 生き通して
- わたしは歌う 人生の歌
- 共に歌おう 人間の歌
- 共に歌おう 人間の歌

この曲は、「一九八八年、作者の山ノ木竹志こと新江義雄（広島合唱団）が角膜移植手術で入院中に作った。：一九八七年の国鉄分割・民営化の際、本来の仕事のとりあげや、反対する者への差別・人権侵害などで、100人を越える国鉄労働者が自ら命を絶ったのが、創作の動機という。新江義雄は、その一人ひとりの家族と人生に思いを馳せ、入院中に出会った、難病を抱えつつ生きる多くの人々に励まされて作詞作曲した。」(ネット上の出典には、『うた新「歌の小箱」07(06/03/06)』との記載がある)

その記載中には、「2001年日本のおたごえフェスティバルでは北海道の駒沢大学付属岩見沢高校の生徒たちが、岩見沢合唱団こぶしと共に熱唱し、同校の卒業式でも歌った。」とある。

「新しい年が明けたはいいが、希望が持てる訳ではない」、などと言ってはみたものの、「音楽に国境はない」とはよく言ったものだと思ってしまう。人の心にある普遍性のようなものが時を越え国を越えて同じ歌を歌わせ、聴く人の胸を打つのだろう。

雪ふわりまだまだ美しい世界

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(68)

祖蔵 哲

2024年「急変、加速」の哲学

2024年、年初から大混乱である。

元旦一日早々に能登半島を大地震が襲った。十日現在で死者行方不明者は300人を超す大規模地震である。丁度、干支が兔から辰に変わった日。辰という字は「振るう」という文字に由来しており、

自然万物が振動し、草木が成長して活力が旺盛になる状態を表すという。このような緩やかな自然の恵みであればよいのだが急変は困る。気候変動も然り。世の中「急変」の時代である。被害者の方々は寒い中物資も不足し居住環境も最悪な中に今もおられる。救援の手もなかなか届かない状況であるが、それとて私自身もどうすることもできない。せめて災害義援金を送るしかないのかもしれない。そして正月二日。羽田JAL機衝突事故発生。こちらは乗客乗組員全員脱出。地震

とは明暗を分けた。不幸中の幸いであるが、これも「極端」である。

さて、今年はいきなり大ニュースが始まったのでこのコラム恒例の「今年の時事イベント」が霞んでしまうが、気を取り直してざっと見てみよう。

2024年は「選挙イヤー」と呼ばれるように世界各国で選挙が行われる。世界の関心は十一月の米国大統領選挙に集まっているが、周辺諸国では一月に台湾で3月に韓国で選挙が行われる。有力新興国で構成するBRICSでは3月にインド、ロシアでも選挙が行われる。七月のイタリアでのG7サミット、十一月のブラジルG20サミットに向けて先進国は動いていくが、一月のBRICS拡大にみられる、いわゆる「グローバルサウス」の意向が注目される。その動向はいまだに続くウクライナ戦争やイスラエル・ガザ戦争にどのような影響を及ぼすのか。いわゆる「東西」の枠組みからの離脱としての「南北」での立ち位置「サウス」である。ロシアによるウクライナ侵攻は間もなく二年になるが、戦局は膠着状態が続いている。パレスチナ・ガザ地区に軍事侵攻したイスラエルは停戦には否定的で、膨大な市民が犠牲になっている。これらの「東西」戦争を終わらせるには「関係当事者外」の存在が必要である。日本は相変わらず日和見の立場は変わらない。

さてその日本は「新制度イヤー」でも

ある。経済や生活に大きな影響を与える制度改正が目白押しだ。四月には労働時間の残業上限規制の猶予期間が終わり物流・建設・医療の分野で騒がれてきた人手不足の「2024年問題」が本番を迎える。物流や建設の現場では混乱が予想される。秋に予定される短時間労働者の社会保険加入の適用範囲拡大や、マイナンバーカード統一による健康保険証廃止もいまだ混乱している。一方、一月には個人投資家注目の「新NISA(少額投資非課税制度)」が始まる。日本は世界一貯蓄率が高い。この「眠れる資金」を投資に回してもらおうというのがお上の魂胆だ。しかし、その安全性は担保されておらずギャンブルで損しても「自己責任」である。では本年最初の哲学テーマは「選挙」からはじめよう。

(1) 独裁は民主主義から生まれる。

民主主義とは文字通り「民衆」が主権を持つ国の制度である。それがなぜ独裁政治を生むのか。

現在、自民党の派閥・安倍派などは、政治資金パーティーを裏金づくりに利用していた疑惑で東京地検特捜部の捜査を受けている。なぜ当時の安倍政権時ではなく今ころになって検察が動き出したのかよくわからないが、選挙には金がかかる、いわゆる「金権政治」である。どうして民主主義の社会で政治を行うのに金

が必要なのか。それは「選挙」に金がかかるからである。多くの国は民主主義として「代表民主制度」をとっている。ここの選挙は宣伝、広告、買収などありとあらゆる合法非合法の手段を使って票を集める。そして、多数党になり政権を握れば自党に都合の良い選挙制度を作り替え延命を図る。そして権力を使い反対意見を弾圧するのである。このような腐敗した政治に国民は希望を持つことがなくなる。そこで登場するのがポピュリストである。仮想敵を作り出し、国民に一致団結を呼びかける。そして次々と「嘘の事実」を作り出し国民に危機感をあおり熱狂させる。かつてのヒトラー・ナチス帝国。そしてトランプ政権の手法は代表民主主義の脆弱性を逆手にとっているのだ。

古代ギリシアのプラトンは民主主義が二面性を有する統治形態だと指摘した。権力欲に突き動かされた暴力的不正行為こそが、まさにプラトンが想定していたことだった。民主主義は無知で貧しい人々に迎合することで善良な統治を破壊する、見かけ倒しの発明だった。プラトンは、劇場支配制という言葉で表現している。大衆が永久不変の政治法則に逆らってあらゆることに口を出す資格を得ることで、公共の利益を気取りながら、力のない者を美辞麗句でそのかし、力のある者が無法者のように振る舞う統治のあり方を想定していた。デモクラティ

アとは、表向きは人民が支配しているように見えながら、実際には支配されている偽りの政治なのだ。

選挙といえば、今、注目されているのがAI、人工頭脳の活用である。特にアメリカでの選挙はネガティブキャンペーンが主である。ネガティブキャンペーンとは選挙の際に他の立候補者の欠点を指摘したり、誹謗中傷したりすることで、自らのイメージを向上させて当選を目指す運動を指す語である。一般的に、無党派層や情報弱者の支持を集める効果があるとされている。そこで用いられるのがネットを通じて拡散できるAIによる偽の情報である。最近のAIは画像だけでなく動画も生成できるため何が本当で何が偽なのかほとんど判別不能である。すでにアメリカでは今年の大統領選に向けてAI情報が氾濫しているという。そのAI世界的に有名になった「ChatGPT」の開発組織 OpenAI のCEO が去年十一月に突然解任され、そして間もなく復帰するという不思議な事件があった。AIの世界で何が起きているのか。

(2) 「加速主義」という功利主義思想

CEO であるアルトマン氏の解任劇の裏にはどうも「思想」対立があったようだ。当時、理事会のメンバーのうち大半はEAとよばれる「思想」に傾倒していたと言われている。

EA は「効果的な利他主義(Effective Altruism)」の略である。「収入の10%以上を、可能な限り費用対効果の高い慈善団体に寄付しよう」と誓約したコミュニティが形成されている。慈善団体で働くよりも、高収入の職業を得て収入の一部を寄付する方がより『効果的』である」という考え方を共有している人々だ。英国オックスフォード大学の哲学教授が2011年にこの名称を使い始め多くの賛同を得たとされる。この思想はベンサムが始めた「功利主義」の考えを踏襲している。すなわち「結果第一主義」である。より効果の高いものへシフトすることによって社会全体の利益を最大にしようというものである。しかしEAのコミュニティはAIに関してその過度な開発には警戒する立場に立っている。

一方でアルトマンの思想的立場は「elacc」である。これは先のEAに対抗してつけられた名称で「効果的な加速主義」(Effective Accelerationism)の略である。「加速主義」とは「資本主義を自己認識する」と主張し、資本主義を突き詰めてシンギュラリティ(技術的特異点)AIが人間の助けなしに自律的に進化し続ける段階に達すること(に)到達する確率を高めることを良しとする思想である。加速主義は哲学者ニック・ランドが2010年代から言説し始めたものとされる。この思想はAIについて一定の危険は認めつつもそれが全体の利益を最大にする

のであればむしろ開発を「加速」すべきであるという立場である。

結果は周知のとおりアルトマンが復帰し「加速主義」が勝利した。これからはAIリスクを上回る効果を生み出す開発に舵がきられ、そのスピードが加速するだろう。その間にどれだけの危険を生み出し、どれだけの弱者の犠牲者がでるか誰もわからないし、きつと無視されるであろう。こういう功利的な意味からはトランプのような「優秀な政治リーダー」は望ましいことになるためAIはますます活用されることになるだろう。AIは民主主義制度によって唯一の完璧なリーダーを作り出すかもしれない。それは「独裁」と同じ意味なのだ。

さて、2024年は文字通り音を立ててスタートした。しかし、時代を操っているのは音のない静かな顔の見えない独裁者である。グローバル化した企業経営者や巨大投資家は「新功利主義」という哲学思想を身にまとい静かに世界を手玉にとっている。ここに紹介した「EA」や「加速主義」の他には「長期主義」というE・マスクが信奉する思想もある。またいざれ紹介しよう。少し昔までは、「哲学は何の役にたつのか?」と言われていた。しかし、今や哲学は「すぐく役に立つ思想」に生まれ変わっているのである。しかし「誰のために役に立つのか?」とは問われない。本当の哲学を見極めるのも「哲学」しかない。今年も哲学を始めよう。

大峯奥駈道 (74)

下村 嘉明

体験型人間学 24

正月は、仕事始めが四日である。昨年に試験堀をした現場を本格的に掘り、古くなったし尿圧送官を撤去する工事が始まる。五ヶ月間ほど工事期間がかかるので大変な工事である。自宅から割と近く自動車だと三五分ほどで行ける。駐車場も近くにあるのでわりと良い現場だ。そうえ監督とは鳴尾浜の堤防嵩上げ工事で半年ほどの付き合いだし、下請け業者は、今回はじめての工事だといっているから、私につらく当たることはないだろう。問題は、わが社の警備員が私以外、日替わりのように変わるから、書類や現場での注意事項を毎日言わなければならないのが、少し大変なぐらいだ。

肝心の仕事は、工事中は、工事車両が常時置かれるので片側通行を一日中しなければならぬのと、休憩がとりづらい点だ。朝の打ち合わせの時に、各自に休憩のローテーションを伝える。

リーダーをしていて、できる警備員がいると大変助かる。いちいち言わずともうまくやってくれる。逆に、長年の経験があっても、できない人は困る。注意しても反論するだけで、要領よくできないので、すぐに配置場所を変えて影響のないようにする。

出来るやつ、できない奴は、すぐにおかる。毎日、一人でもいいから、出来のいい奴が来てくれることを願って現場に行く。

新型コロナウイルス禍愚考

(その40)

明石 幸次郎

正月1日夕刻の能登半島沖を震源地とする大地震で石川県を中心に多大な被害が発生しました。家屋損壊などで、避難されている方が3万4千人以上もいると報じられています。コロナ感染がおさまり、久しぶりに帰省して家族団らんを囲んで幸せを感じておられた人も大勢おられたことでしょう。この幸せを一瞬にして自然災害によって奪われ、不幸のどん底に落とされてしまいます。

そして、この被害を受けた方が、失われた幸福感を感じるような元通りの日常を取り戻すには長い時間がかかると思われます。もし自分自身がこのような災害に会えばと思うと資金的、心身的、年齢的にも日常を取り戻すことは不可能だと思います。

例えば復旧の過程が幸福を求める過程

のように幸福があるなどと言われても心に響いてこないと思います。

細やかではあるが、穏やかな日常性の重要性は年を取るごとに大きくなるように感じます。その日常性の中にこそ、喜びとか幸せを感じるものです。

養老孟司さんがテレビで語っていましたが「幸せとはなにか？」と質問された後、「考えたことはありません。何かが起きた後に、感じるものが幸せか？定義出来るものは幸せではない。思いがけないもの、思いがけたような幸せはないものである」と答えていました。この人は日常的に虫を追っかけていることが、楽しいことであり、それが出来ることが幸せであると思います。そんなことを一々、幸せであると感じないものなんですか？

自分に振り返っても日々何とか日常生活を送れている限り、幸せかどうかなど考えないものです。今回の地震のような災害、病気、大怪我、身近な人の死、離婚、人間関係のトラブル、財産を失うなどが起こった時に自分は幸せではなく、不幸だと感じさせられるものです。

「生きているだけで意味がある」五木寛之 「生きているだけでも丸儲け」さんま など、幸福だ、不幸だなどと意識しなくても、生きていることそのものに価値があるなどと思えるようになれば楽に生きれるかも知れません。亡くなった兄の80歳になる友人が年賀状に「ゴルフが出来、酒が呑める。それで十分！」と

書かれていました。自分ならどうだろう？「麻雀が出来、呑んで話せる友人がいればそれで十分！」などと言えるのか？

63歳の自殺も出来ず、ホームレスになることも出来なかった女の人から問われた「幸せになるにはどうしたら良いか」の心に響く答えは、自分なりにどうか？

養老孟司先生のように「そもそも幸せとは何かなど考えたことがないので分からない」とはこの人を突き放したような言い方になるように言えない。今、愚考するに「あるがままの今を受け入れて、死を思いながら今を生きることが、心の平安、幸せに繋がることになるかも知れませんね」と言うこと位は言える気がします。

ゆく年の惜しくもあるかなます鏡
見るかげさへにくれぬと思へば

「ます鏡」は「真澄の鏡」のことで、「澄み切ったものがよく映る鏡」のことで「さへに」はこの歌では「年だけでなく、我が身も」という意味です。歌意は「行く年のしみじみと惜しく感じられることだ。ものがよく映る真澄の鏡にある自分の姿を見ると、年が暮れるだけでなく、自分も人生の暮れ方をむかえ年老いてしまった、というものです。老残の我が身を嘆いた歌ですが、貫之の歌にしては少し平凡に感じられる歌です。しかし、年老いていく我が身をかえりみていくばかりの悲哀を感じるのは人間誰しもあることで、年齢を重ねれば黒髪は白くなり、あるいは抜け落ち、歯は抜け初め、顔にはシミとシワが増えていく、というのは誰もがたどっていく道です。

もちろん、小林一茶とて同じこと。いや、人並み優れた感性を持っていた一茶ですから、その悲哀はひとしおだったであろうと想像できます。以下、自らの「老い」を一茶はどうとらえていたのか、彼の晩年の作品からそれを見てみようと思います。

オクラの山たより (88)

困了生

一

古今和歌集の巻第六「冬歌」(342)に帝から「歌たてまつれ」と命ぜられて紀貫之が詠んだ次の歌があります。

二

まず、次の句から。いずれも一八二二(文政四)年、一茶五十九歳の作品です。

- ① 今年から丸儲(もじ) けぞよ
娑婆(しゃば) 遊び
- ② もう一度せめて目をあげ雑煮膳
- ③ 陽炎(かげろう) や目につきまよふ
笑ひ顔

①は元旦に詠まれた句です。「娑婆」とはこの時代にあつては「苦しみが多い現世」という意味で今の俗世間といった意味の語とは違います。今年からは丸儲けだ、生きにくいというこの世をせいぜい楽しむのだ、という句意ですが、この句に付けられた次の長い前書きを読まないで一茶の真意が分かりにくい句です。句の後にある() はこの前書きの大意です。

去る十月十六日、中風に吹き倒されて、すぐに北郎(ほくぼう)「墓場」という意味の夕(ゆうべ)の忌(い)み忌(い)みしき虫となりしを、この正月一日は、初鶏に引き起こされて、とみに東山の朝日のみがき出せる玉の春を迎ひるとは、我が身を我めずらしく生まれ代りて、ふたたびこの世を歩く心ちなん。

(去年の十月十六日に脳卒中で倒れ、生死の境をさまよっていたが、この正月一日の初鶏の声に引き起こされて、玉のよるうに感じられる春を迎えることができなことは、思いもかけぬことで、我が身が新しく生まれ変わって、再びこの世を

一茶は去年の十月十六日に弟子の所へむかう雪道の途中で転倒、脳卒中を発病して半身不随となりましたが、大根おろしの絞り汁でなんとか半身不随は脱したのですが言語障害は残り、以前のように足が動かなくなりしました。一度、落としかけた命です。一茶にとってこれからの人生は本来なればなかつたもので、これは「儲けもの」というわけです。大病を患い後遺症に苦しんでいるはずですが、一茶は生きていくだけでも「丸儲け」だ、と言つてのけます。姿はおもしろいですが、晩年期の始まりにあつて一茶は自分の人生を肯定的にとらえています。

しかし、こう詠んだ直後にさらなる不幸が一茶を襲います。去年の十月に生まれた次男の石太郎、石のように盤石に育つて欲しいという思いから名づけた石太郎が一月十一日に亡くなりました。②と③の句は、その悲しみを詠んだ句です。次の句も一茶の子を失った切ない気持ちをよく表わしています。

- ④ 赤い花(こいら)こいらと

さぞかしな

句意は「ほらここにも赤い花が咲いているよと一緒にあそべたのに」というもの。率直な詠みぶりは一茶らしいといえます。この句の前書きもまた切ない内容で

九十六日の間、雪のしらじらしき寒さに逢いて、この世の暖かさを知らず仕廻(しま)ひしことのいた(いた)しく、せめて今ごろまでも居たらんには

去年の十月生まれ今年の一月に亡くなった石太郎。「九十六日」は石太郎が生きることのできた時間。この時期の信濃は最も寒いころです。一茶はこの世の暖かさも知ることなく亡くなった我が子を前文で哀れんでいます。

三

この石太郎を生んだ妻の菊はあくる一八三二(文政五年)年に三男金三郎を生みますが、その翌年(一八三三年)の五月に亡くなり、金三郎も同じ年の十二月に亡くなっています。一茶にとっては不幸続きの時期といえますが、一茶は悲嘆にくれていたばかりではありません。次の句があります。この句にも長い前書きがあります。

げにげに諺(ことわざ)にいふ通り、

愚に付ける薬もあらざれば、なほ行く末も愚にして、愚のかはらぬ世をへることを願ふのみ。

- ⑤ まん六の春となりけり門の雪

句にある「まん六」は「真陸(まろく)」の撥音便で「中正で円満、完全なこと」を意味する言葉です。満六十歳とかけて「まん六」と詠んでいます。句意は「満六十歳の春になった。めでたいことに門には雪が残っている」です。前書きからは、これからも愚に徹して生きていくんだという一茶の意志が見えます。ここには悲しみにうなだれる姿は見えません。

- ⑥ 春立つや愚の上にまた

愚にかへる

一八三三(文政六年) 元旦の句

ここにも「愚」という言葉があります。晩年の一茶にとつて自らの「愚」を見つめることが人生の大きなテーマとなりました。「愚」とは単に「おろか」ということではなく、「愚」とは悟りを開き得ずして、煩惱にさいなまれながら生き続けていくことだと一茶は考えていたようです。多くの人は自分をよく見せよう賢く見せようとして、本当の自分を見つめることなく自分を「まかして生きていく」とします。晩年の一茶はそうした生き方を拒否して自身の「愚」を見つめて生きていこうとしたようです。

「愚」と馴(な)れ合うことなく、「愚」に徹して生き抜いていくこと。⑥の句はその決意表明のような句です。

といつても加齢から来る体力の衰えは
どうにもならなかったようで、文政四年、
五年に次のような句を残しています。⑦
の句は文政四年の作、⑧から⑩の句は文
政五年の作です。どの句も自らの老人の
姿を戯画化したような句でのん気な老人
気分の句にも取れます。

⑦ 極楽が近くなる身の寒さかな

⑧ 初雪に一の宝尿管(しびん)かな

⑨ 初雪や我に取りつく

不精(ぶしょう) 神

⑩ 我が恋は夜ごと夜ごとの

湯婆(たんぼ) かな

⑪ 死に下手(へた)とそしらば

誹(そし)れ夕巨燵(ゆうこたご)

尿管・湯たんぼ・炬燵が老いたる身には
欠かせない三大必需品となったのです。

しかし、一八二三(文政六)年、この気
楽な気分を一気に吹き飛ばす不幸がおき
ます。さきほど触れた一茶の最愛の妻菊
の三十七歳の死です。

⑫ 小言いふ相手のほしや秋の暮れ

⑬ 小言いふ相手は壁ぞ秋の暮れ

⑭ 小言いふ相手もあらばけふの月

小言をいう相手が壁では秋の名月を一人
でめでもできません、喧嘩もできません。
むなしく秋風が吹きすぎるだけです。
そうした一茶の窮状を見かねて親族の

仲介により、翌年、一茶は飯山藩士の娘
で三十八歳の雪と再婚しますが三ヶ月で
離婚。その直後に一茶は脳卒中を再発し
言語障害になります。

しかし、一茶はこうした事態にも心が
ひるむことなく、竹駕籠に乗って信濃の
門弟たちを巡回指導しています。そして、
依然として政治や社会の動きへの関心も
衰えることはありませんでした。一八二
四(文政七)年十一月、門弟巡回の途中で
病魔を押して門弟の一人に書いた書状に
以前に紹介した次の句があります。

江戸へ大馬下りし候由、御覧なられ候や

⑮ 日本の年を取るのがらくだかな

「文路あての書簡」から

この年、紀州藩主より將軍に献上された
ラクダが中山道を下ったという情報を聞
きつけ詠んだ句です。ラクダ「楽だ」を
かけて、日本は住みよい国だよね、とす
るあたりはもう少し若いころの句に見ら
れた愛国的な気持ちは失われてはおら
ず、頭はしっかりとしていたようです。

四

老人と信濃の伝説といえは有名な「姥
捨(うばす)て伝説」です。年老いた親を
山に捨てるという信濃の棄老伝説です。
老いが進むにつれて、これまで気にしな
かった信州のこの伝説が信濃に生きる俳

人一茶も気になるようになりました。
今、今籾ノ井線の姨捨(おはす) 駅近
くの冠着山(かむりきやま)は古来姥捨山と
呼ばれ、「今昔物語」や「古今和歌集」

などの古典文学に取り上げられ、世阿弥
の謡曲「姥捨」の題材ともなったので、
芭蕉もまたそれにならい一六八八(貞享
五)年にこの山を訪れています。「おも
かげや姨ひとりなく月の友」はこの時よ
まれた句です。

一茶は芭蕉の「更級紀行」にある「さ
らしなの里、おばすて山の月見んこと、
しきりにすすむる秋風の心に吹き騒ぎ
て」という文章に誘われて、一八〇九(文
化六)年八月十五日、四十七歳の一茶は
姥捨山に登って月見をしました。その時

は「浅間山あるかに見えて、烟茶を煮る
けぶりをさそひ、善光寺は遠く隔たれど」
と優雅な気分ひたつて下山しました。
この気分も五十代を過ぎると変化しま
す。⑩と⑬の句は一茶五十三歳で文化十
二年の句、⑭から⑲までの句は一茶五十
五歳で文化十四年の句、⑳は一茶五十七
歳で文政二年の句で㉓は一茶五十八歳で
文政三年の句です。

文政三年の句です。

⑯ かかる時姥捨てつらん夜寒かな

⑰ 捨てられし姥の日じややら

村時雨

⑱ 秋風やあす捨てらるる姥が顔

⑲ 姨捨に今捨てられしかがし哉

⑲ 姨捨に今捨てられしかがし哉

⑳ 捨てらるる迄とや姨の落葉かく
㉑ 姥捨てた罪も滅びん今日の月
㉒ 姨捨てた奴はどこらの草の露

これらの句には名月を觀賞してめでると
いった風雅な気分はまったくありません。
これらの句にあるのは捨てられる老
婆と彼女を捨てる者の悲哀が読み取れる
だけです。老いとは何か。一茶は徐々に
老いていく自分をかえりみて、切実な思
いかられたことでしょう。そのため姥
捨てはつい意識してしまいうテーマになっ
たでしょう。

五

少し寄り道をしましたが、最晩年の一
八二六(文政九)年ともなると、元来の
酒好きと老化現象によつて病状は悪化を
続けました。出向いた門邸宅でしばしば
迷惑をかけ家に帰っては床につくことが
多くなり、そして、ついに次の句を詠む
ようになります。

㉔ ぼつくりと死ぬが上手な仏かな

誰にも迷惑をかけずに死にたいと言つて
はいるのですが、六十四歳の一茶の生き
ることへの執念は消えることなく、この
句を詠んだ八月に三人目の妻やを(三十
二歳)と結婚します。やをは一茶の看病
のために結婚させられたような女性です

が、一茶の精力は衰えを知りませんでした。相も変わらず門弟たちの家を次々と廻っていました。そんな元気さを見せる中でも次のような句を残しています。「一茶俳句集」(岩波文庫 丸山一彦校注)の最後にある句です。

耕さずして食らひ、織らずして着る体(てい)たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎなり。

②⑤ 花の影 寝まじ未来が 恐ろしき

文政十年

この句の前書きは一茶の心にはずつと自分分は「不耕の民」であつたということへの劣等感が存在したことを示しています。遊民である自分が桜の花咲く木の下でちよつとでも休むとそのまま死ぬのではないか。そうしたら、この世で遊民として暮らした自分の行き先は恐ろしい地獄だろうな、とつぶやく一茶です。死を予感しつつ、それから逃れたいと心の中でもがいていたのではと想像させる句です。

この句を詠んだ数ヶ月後の十一月十九日、一茶は柏原の大火で焼け出されたための仮住まいである土蔵で亡くなりました。享年六十五歳でした。

隠された歴史(63)

満田 正賢

今回は、喜田貞吉氏の『中天皇考』に沿って考察を進めた為、少しわかりにくい話になってしまいましたが、天智天皇の皇后である倭姫王(やまとひめ)「わのひめおう」とも読める)が「中天皇」・「中皇命(なかすめらみこと)」や「太后天皇」と呼ばれていたことをご紹介します。そして、喜田氏は倭姫王が天皇であつた期間を天智崩御と天武即位の間の極めて短い期間であると考えましたが、実際には倭姫王が天皇であつた期間は、天武期とかさなっていた可能性が高いことをご紹介しました。

天武天皇の和風諡号は天淳中原瀛真人(あまのぬなはらおきのまひと)天皇と言います。天武十三年に制定された八色の姓(やくさのかばね)では、真人は臣下第一位の姓となっています。なぜ天武が自らの名前に真人という言葉を使ったのかは疑問とされていますが、天武が倭姫王を倭(日本)国王として奉り、自らは臣下第一の天皇と名のついていたとすると合点がいきます。

「隠された歴史(20)」でご紹介しましたが、日本文学大系(岩波)版『日本書紀』の編者である坂本太郎氏は『天智紀の史料批判』において「天智紀を一見して気づくことは、この巻に編集上の遺

漏欠陥が多く、未定稿ともいいたような杜撰などころの見えることである」と述べています。具体的には「皇太子」と書くべきところを「天皇」と書いていたり、中臣鎌足は天智八年十月から「藤原内大臣」となったと書く一方、天智八年五月に「藤原内大臣」と書いていたりしていることを指摘しています。そして複数の記事が異なった年に重出して現れていることも指摘しています。

私は、天智天皇の不可思議な即位と天智紀の編集上の遺漏欠陥の原因は、天智

七年の即位の儀式が倭国王として正式に行われた王位継承儀式であつて、そのつじつまを合わせる為に混乱が生じたのではないかと考えています。天智が継承した倭国(九州王朝)の王を自らの母親(皇極)が重祚した天皇であることとつじつまを合わせたと考えます。

さて、今回は万葉集の中の倭姫王の歌と、万葉集の中で強い存在感をもつ女流歌人・額田王にふれてみたいと思います。

万葉集には第一巻に収録された「中皇命」とは別に、倭姫王としての歌が四首収録されています。

*天智天皇がご病気の時に倭姫皇后がさしあげた歌

第一四七番歌

「天の原ふりさけみれば大王(おほみ)の御寿(みいのち)は長く

天(あま) 足らしたり」

第一四八番歌

「青旗(あをはた)の木幡(こはた)の上を通ふとは目には見れぬど直(ただ)に逢はぬかも」

第一四九番歌

「人はよし思い止むとも玉鬘(たまかざら)影(かげ)に見えつつ 忘れぬかも」

*天智天皇崩御を悼む歌

第一五三番歌(倭姫王の挽歌)

「鯨魚(いさな) 取り淡海の海を沖放(さ)けて漕ぎ来(きた)る船辺(へ)付きて漕ぎ来(きた)る船沖つ擢(は)いたくな撥ねそ辺(へ)つ擢(は)いたくな撥ねそ若草(わが)の夫(つま)の思ふ鳥立つ」

まず、なぜ同一人物と思われる「倭姫王」と「中皇命」の歌が別人物として載っているかという問題です。万葉集には「原万葉集」として成立していたであろうと思われる部分があります。古田武彦氏は、「原万葉集」は九州王朝によって編纂されたものであり、それらの歌はあたかも大和で作られた歌であるかのような題詞をつけられていると考察しました。そのような視点で見ると、「中皇命」の名称は「原万葉集」に収録されていた歌に用いられ、「倭姫王」の名称は天智天皇崩御前後の時期に作られた歌に用いられているという区別が出来ると思います。第一五三番歌には、琵琶湖に鯨が泳ぐはず

がないので、これは別の地方の海を歌ったものではないかという説もあります。重要なのは、この歌は天智天皇崩御の際の一連の挽歌のなかで倭太后が歌ったとされていることです。

天智天皇逝去の時の挽歌は一四七番歌から一五五番歌まで続き、一四七、一四八、一四九、一五三が倭太后（倭姫王）、一五一、一五五が額田王、一五〇が婦人（姓氏未詳）、一五二が舍人吉年（舍人氏出身の女官）、一五四が石川夫人（大薙娘（おおぬのいらつめ）・蘇我赤兄の娘）の歌です。前後の歌との関係から、倭太后（倭姫王）の挽歌であることは間違いないと思われま。

この歌の「淡海」とは天智天皇の近江朝との関連で琵琶湖であろうとされていますが、琵琶湖に鯨が泳ぐはずはありません。倭姫王が天智（中大兄）と初めて出会った博多湾は当時入り江が現在の住吉神社まで達しており那珂川の淡水が湾に入り込んでいたと思われま。倭姫王が中大兄と出会った時に博多湾の沖の玄界灘で鯨が泳いでいたという若き日の思い出を偲んでいると考えればピタリするのではないのでしょうか。即ちこの挽歌は、倭姫王が天智（中大兄）と出会った時に博多湾岸にいたことを暗示したものでないのでしょうか。

次に額田王です。額田王は万葉集を代表する歌人の一人ですが、その正体が不明です。額田王は日本書紀に「額田姫王」

と記されており皇族であるのは間違いありませんが、日本書紀には天武天皇の最初の妃であったことと、鏡王の娘であったこと以外は記されていません。一方万葉集には、天智天皇の妃であり大海人が慕う歌人という存在で記されています。皇族としての額田王を探る一助として鏡王を宣化天皇の子孫とする系図が存在します。「宣化天皇→火焔皇子→阿方王→額田鏡王（*『新撰姓氏録』右京皇別撰津皇別）」という系図です。私の仮説に従って宣化天皇の子が倭国（磐井王朝）を乗っ取って建てた後期九州王朝の皇族と考えると、正体不明の皇族の存在が説明出来ると思えます。

額田王については、有名な「あかねさす紫野行き標野（しめの）行き野守は見ずや君が袖振る」という歌があります。大海人皇子がこの歌に答えて「紫のほへる妹を憎くあらば人妻故に我れ恋ひめやも」という歌をうたいます。この歌は天智天皇の妃となった額田王と前夫である大海人皇子（のちの天武天皇）が密かに取り交わした歌とされ、天智―額田王―大海人の三角関係の歌だと古来よりいわれてきた歌です。現在ではこの二首は二人の座興の歌だろうという解釈が主流になっていますが、その場合でも三角関係自体は否定されていません。

この三角関係には「なぜ額田王は大海人（天武）の妃となり大友皇子の正妃となる十市皇女を生みながら、中大兄の妃

となったのか」という大きな謎が残ります。この謎に答える一つの仮説として、大海人が一時的にいなくなった、又は死んだと伝えられた、ということが考えられます。このような異常事態は通常時には考えにくいですが、例えば太平洋戦争後の一時期に同様な例が生じたことが事実としてあります。当時としては白村江の敗戦がこのような悲劇を生んだのではないのでしょうか。

日本書紀の天武（下）紀では、天武の妃・夫人を皇后（正妃）、大田皇女、大江皇女、新田部皇女、氷上娘、五百重娘、大薙（おおぬ）娘、と紹介した後で、「天皇はじめ鏡王の娘額田姫王を娶って十市皇女を生んだ。つぎに胸形君徳善の娘、尼子姫を納れて、高市皇子を生んだ。次に宍人（ししひと）臣大麻呂の娘、かじ（かじは木偏に穀）娘は二男二女を生んだ。その一は忍壁（おさかべ）皇子という。その二は磯城（しき）皇子という。その三は泊瀬部（はつせべ）皇女という。その四は託基（たき）皇女という。」と記しています。

天武が若い頃にもらったとされる三人の妃のうち額田王とかじ娘は出生不詳です。宍人臣は天武紀で初めて出てくる氏であり、宗像氏との関連を考えるとこの三名の妃はいずれも天武が筑紫にいた頃にもらった妃だったのではないのでしょうか。宗像氏の娘である尼子姫が筑紫で、

壬申の乱（六七二）の天武方総大将とな

った高市皇子を生んだと想定すると、大海人（天武）は白村江の戦い（六六三）の十年前（最も遅い場合を想定しても五年前）には筑紫にいたことが想像出来ま。天武（大海人皇子）が、天智（中大兄皇子）が筑紫に来るよりかなり前に筑紫にいた人物であるとすると、白村江の戦いには中心的な立場で参加していたことが想定されます。更に言えば白村江の戦いの時に捕虜になった可能性もあります。

額田王は倭国（後期九州王朝）の宮廷歌人であり、最初大海人（天武）に嫁いだが、白村江のあと中大兄の妃となったと想定します。古田武彦氏は「万葉集の中では九州で作られた歌、白村江の戦いを歌った歌が消されているが、歌としては残っており、ただそれが近畿で作られた歌としての題詞を付けられている」と論じていますが、額田王が白村江の前に大和で歌ったとされる歌の題詞は万葉集の編集時点で書き込まれたものと考えれば、前述の仮説は成立します。

倭姫王と額田王に関する上記のそれぞれの仮説を比較してみると、内容は違いうにせよいずれも九州王朝の人物であり、白村江の敗戦によって筑紫を離れ、中大兄（天智）の妃となったという意味では、非常に似た運命をたどったと考えられます。

万葉集は、日本の独自の言葉で綴られた歌を編纂した、貴重な文化的遺産です。

しかしその現存する万葉集の核となった「原万葉集」が、没落する九州王朝で生み出され、中皇命（倭姫王）と額田王という二人の女流宮廷歌人が活躍していたとすると、非常にロマンのある話ではないでしょうか。「没落する王朝には文化の華が咲く」という現象は洋の東西に共通した法則であるように思います。

私は、倭姫王と額田王がどの様な関係であったのか、それぞれの親と考えられる「斉明天皇」「鏡王」も含めて、どのような人物であったのかについての明確な答えを現時点ではもってはいません。しかし万葉集に結実した日本の独自文化を生み出した九州王朝とその中心にいた女性像を探ることは、非常に興味深い研究課題であると考えます。

「道をゆく」 四七

成瀬和之

「女芭蕉の心意気 桑原久子の旅日記から」一五 おわりに

『女芭蕉の心意気 桑原久子の旅日記から』を自費出版しました。

この本の題を『女芭蕉の心意気 桑原久子の旅日記から』としました。桑原久子さんは歌人だから『女西行の心意気』でもよさそうです。しかし、和歌と俳句の違いはあれ、同じ「散文と韻文」で構成されているのですし、旅人としてのインパクトは、やはり、松尾芭蕉でしょう。私は『我が奥の細道の旅』という前作を書いていることもあり、芭蕉の方が親しみますので『女芭蕉の……』となつた次第です。

そして、江戸後期の商家の女主人で歌人たちのエネルギーとたくましさを示す題として『女芭蕉の心意気』がふさわしいと考えたのです。

田辺聖子さんの『姥ざかり花の旅笠』の魅力は、その道草ぶりにあると、「二六③田辺聖子」のところで書きました。私も田辺聖子さんにあやかって、桑原久子『二荒詣日記』から、どんな飛翔させていただきました。そこで、副題をつけて『女芭蕉の心意気 桑原久子さんの旅日記から』としたのです。

田辺聖子さんは『姥ざかり花の旅笠』の「あちがき」に次のように書いていますが、同感です。

「二年以上も宅子さんらの旅につきあって、私はすっかり彼女たちに友情を感じてしまった。」「女性文化の暗黒時代と思われていた江戸の世で、それも天ざかる鄙の地、商この家の女たちに、こんなにみやびでゆたかな文化が息づいていたとは。」

私は、高校時代の恩師、一〇〇歳の菅谷省吾先生に紹介して頂き、『姥ざかり花の旅笠』を手に入れました。そしてファンになりました。

そして、小田宅子さんだけでなく、桑原久子さんにも光があたり、宅子さんと久子さんがともに一層注目されるようになることを願ってこの本を書いた次第です。

『女芭蕉の心意気』は、『我が奥の細道の旅』『われもまた熊野古道』とともに、私の「道行」三部作の完結編です。

私は『我が奥の細道の旅』（二〇一九年）『われもまた熊野古道』（二〇二二年）を自費出版し、そして今回、中山道を含む『女芭蕉の心意気』の三点セットを書くことになったわけですが、『女芭蕉の心意気』は、私の「道行」三部作の完結編にあたります。

『歴史と古道』（戸田芳実著）を読んでいると、偶然にも「古道の再生」の原点となった「三つの道」と重なっていることに気づきました。半世紀近くに及ぶ古道整備の恩恵を受けて私の「道行」があることに感謝の気持ちを持てません。

二〇一八年に大病をし、その回復の過程で二〇一九年一月一五日に『我が奥の細道の旅』を自費出版しました。コロナ禍の中、二〇二二年一月一五日に『われもまた熊野古道』を出しました。そして新型コロナが「二類相当」から「五類

相当」に引き下げられた二〇二三年五月について私も新型コロナウィルスに感染してしまいました。そして、その年の一月一五日に『女芭蕉の心意気』を出版することになった次第です。

そのような経過を思うと、都会から離れて自然に触れる。そして、ともに道を歩いたり、旅をしたり、飲食などをしたりができるといふことは、山極壽一さんの言うように、人間にとつて最大の幸福なのではないでしょうか？

歌手の、さだまさしさんの「主人公」という歌の中に次のようなフレーズがあります。

「あなたは教えてくれた
小さな物語でも
自分の人生の中では
誰もがみな主人公
時折思い出の中で
あなたは支えてください
私の人生の中では
私が主人公だと」

私は、この歌を聴きながら、今の時代に大切なことを表現した歌だと感じました。

長らく「道をゆく」シリーズをお読みくださり、ありがとうございました。『芥川だより』に「とどまることを知らず」（編集長）怒涛のように書き続け、少々くたびれました。「出力」ばかりで「入力」

が不足してきて、かつて「いきものがかり」のボーカルがやったように「放牧」が必要となりました。ここで一年間、休筆します。

では、またの機会に。

編集後記

SK生

▲2024年の年が明けた。しかし、その正月気分は能登地震で消し飛んだ。そして、羽田空港での事故である。犠牲者にはお悔やみ、被災者には励ましの思い、元日から救援活動に懸命に従事している方たちには尊敬と感謝の言葉を献じたい。そして、被災地の一刻も早い復興を願っている。

▲さて、一年の始まりに暗いニュースが続いたわけだが、新聞に載せられた知識人の新春インタビューにも明るい内容は少なかった。ある評論家は日本国内の総生産（GDP）が世界に占める割合は明治が始まったころは3%程度であり、今のままで30年後のそれは3%台にまで落ち込むと予想されるという。現在でも国民一人あたりのGDPは世界で34位だそうだから、その時代、つまり我々の孫の時代だが、そのときに人々の暮しがどうなっているのか。明治初期の貧しさにもどっているのか。筆者には想像もできぬ。また、技術立国を旗印としていたのに国産中型ジェット旅客機開発から撤退し新型コ罗纳クチンは3年以上作れなかったともいう。技術開発のための地道な基礎研究を軽視して「安ければ外国から買った方が効率的だ」という国際分業論に立って外貨を稼ぐ輸出産業で我々日本人は豊かさを求めてきた。その結果が今の超円安だと言われれば、そうですね、とうなずくよりほかに

俳句

影山 武司

砂時計の砂さらさらと去年今年
幼子は夢の途中や初明り
初日の出地球の回る音のして
ものすべて光りはじむる初茜
初日背に受けて郵便配達夫
ボサノバで始むる水仕お元日
海の香を足して華やく雑煮椀
いかのぼり五色の脚の空に鳴り
「老松」の松あをあをと能初
「龍」の舞ひ「虎」猛るかに吉書揚

ない。▲この現状からこれからの重要な課題を考えると、第一に思いつくのは我が国の食糧自給率の極端な低さである。それを考えると「食と農」の問題は急務であろう。昔、兵糧攻めにあつて降伏した城が多かつたことを考えれば国防というならば、まずはこれだろう。兵器をいくら新調したところで国民が飢え死にしているようでは何を守っているのか分からない。そして打ち続く地震や新型コロナウイルスの教訓から防災と医療も重要な課題だ。そして、これからの日本を支えていく人を育てる教育も大事である。世界各国の15歳を対象とする学習到達度調査「PIISA（ピザ）」で優れた成績をおさめているという我が国の青少年がその後の人生においてその能力を伸ばし、そして、それを生かすことができているかどうか。不安に思うのは筆者だけではあるまい。▲ここまで書いてくるとふれたくなるのが、昨年末から続く自民党派閥の政治資金パーティーをめぐる裏金疑惑である。ついに現役議員の逮捕というところまできたが、それにしてもあきれられるほどの腐敗ぶり知的劣化ぶりであった。

「捜査中なので……差し控えたい」という決まり文句を何度聞かされたことか。言葉を失った痴呆状態の人を見る思いであった。筆者の周辺には岸田内閣支持者はいないが、この体たらくを見れば当然だろう。ここで思い出すのは田中角栄元首相の名セリフである。彼は選挙演説の際、例のがらから声でこう言ったという。「自由民主

党がつぶれても、やむをえん。日本がつぶれなければいいんだ。そう思うんですよ、皆さん！ 政党の看板の掛けかえはききませんが、国家民族の掛けかえはきかないのであります」と。いろいろと問題のある首相だったが、話は明快だ。日本がつぶれる前に、私たちの唯一の政治行動である選挙にはぜひとも行かねばなるまい。▲最後に新年を祝う短歌を一首。「万葉集」の末尾に載っている歌である。七五九（天平宝字三）年、大伴家持が因幡国国庁での新年の宴で詠んだ歌である。「の」音の繰り返しが心地よい歌だ。

新（あらた）しき年の 初めの 初春の
今日降る雪の いや重（し）け吉事（よ）こと
元旦の今日ふる雪の ようにいよいよ良い
ことが重なつて起きますように、という祈りのような歌だ。新年の到来を寿（ことほ）ぐ歌としてはいささか暗いのだが、いまの筆者の気分にあう歌として掲げておきたい。

毎月毎月いろいろな句を読んでいると、さまざまな思いが湧きあがってきます。川柳はまるで心の散歩道。

また火の手救えぬ国是非を問う 孝子
平和な国子の未来まで守りたい 初子
人のエゴ平和のきざし露見えず 信一
ウクライナガザと続いて次はどこ 季生

自然現象ではない戦争がなぜ起きるのか。戦禍を破るのは、あえて言えば戦う兵を含めて、権力から随分遠い所にいる人たちです。昨年の川柳大会の入選句に、「戦火浴びる子どもに何の罪がある教義」、「大戦の火種を消壺に入れる 龍太郎」などの句がありました。「ゲルニカが今日も生まれる青い星」であっていいのでしょうか。

緊張がとけてゆつくり茶をすする 浜子

どこかで見た俳句「難問が解けて見上げる冬の月」を思い出しました。ホッと飲んで飲むお茶もあり、飲んで心が落ち着くお茶もありますね。

別れ際泣いた女が強くなり 鈴子
来世は男で女泣かせたい 鈴子

この二句の男と女を入れ替えても、句は成り立つでしょうか。人というもの不

思議なもので、背景にある男と女の実態はきつと広げて深いのです。

徘徊と言われても良し良く歩く 和俊
歩こうよコトリとシューズ裏返る 恵子

この地に越してきて十余年。毎日二、二時間、川の土手を歩いていました。「名もない」草や花の名を知り、春には土筆や菜の花を摘み食べました。コロナ禍で籠る日が続くと、何やら心も体も弱くなったように感じたものです。また春が来たら、弁当を持って出かけようと思います。

バッタがぴよん小さな秋を連れてくる

喜一郎

秋の夜、川の土手は虫たちの大合唱で車の音にも負けていません。まことに「コロナにも自粛をしない虫の声」でした。やがて霜が降りる頃、枯れた草の茎のあちこちにすがりついて絶えた虫たちがいました。虫たちは皆、天をめざして茎を登っていました。「ザリガニもバツタもヒトも脱皮する」、私も負けていられません。

里の秋手刈り懐かし稲の束 廣
新米で握るおむすび塩加減 千恵

父の小さな棚田は二反もなく、米の九俵もとれたか。親子七人は麦を一割、二割と入れて食べた。祭りと正月と遠足の時に食べた白い飯の旨さを今でも思い出す。春と秋に「農繁休暇」があり、田植えや稲刈りを手伝った。食べ飽きることがないコメ、「新米が茶碗で踊る秋祭り」。

用無しで案山子に着せる作業服 ふみお

案山子に着せたのは着古した作業服。しかしそれだけではない。これを着て農作業をすることはもう無いか、という作者の感慨を思う。

映る顔いつしか母の顔に似る 節子

顔や体付きや一寸した仕草までが親に似てくる。誰もがいつかそう感じます。男に限らないが、鉄矢は歌った。

♪いつの頃からか

親父と同じ 手つきでひとり酒を飲む

こんな仕草が 似てくるなんて男という奴は 繰り返し
そろそろ人生真ん中あたり
俺の人生 真ん中あたり

嘘つけぬ代わり黙っている無骨 みちる

「言わんでも分かるだろうと言う男」がいて、「言われんと分かりませんと言う女」がいる。句の男と女は入れ換えることもできますが、「そこにいた それだけでいい そんな人」がいいなあ。

淋しさを人混みの中消して行く 邦弘

都会の人混みは、もしかすると一番孤独なところかもしれません。人混みの孤独さに私の淋しさが溶けて行く。私も、「人混みの中に孤独を捨てに行く」と思ったことがあります。「文明は人を孤独にする装置」であり、「文化とは孤独に耐えている力」なのでしょうか。



山茶花の垣根